

明治期の農村市場における商品担保金融の一考察

——秋田県平鹿郡増田町石田家の事例——

小 岩 信 竹

一 はじめに

江戸時代後期以降、農村での商品生産が進み、山間の畑作地帯では、商品生産を行いつつ、米を他地域からの移入に依存する事例がでてきた。秋田領の雄勝郡もそのような地域の事例であり、煙草、生糸などを産出し、米などを移入していた。雄勝郡の商品流通をめぐる集散の中心地は、隣接する平鹿郡の増田村（のちに町）であり、明治期以後もこの関係は維持されていた。^①江戸時代以来、明治初期にかけて、雄勝郡の商品流通は増田村の商人支配のもとにあったが、その内容は変化してゆく。^②

増田の支配的な商人は、江戸時代以来の特権商人であったが、明治期以後、その特権は否定された。また、商品の売買が自由になり、商品を担保として金融を行う銀行の営業も開始された。商品移動の経路自体に変化がない農村市場においても、取引が持つ経済的意義は変わらざるをえない。本稿は、主として米を中心に、銀行の介在による農村市場の性格の変化について考察することを課題としている。

ところで、明治初年の金融、なかでも農村市場における商人をめぐる金融は、近隣の農民との関係においては、商人が自ら前貸し金融を担い、

他地域へ商品を移出する場合は、港湾等の中継地市場の商人や倉庫業者との貸借関係にも依存することがあった。農村市場を担う商人による金融機関の利用は、銀行制度が整備されるに至って活発になった。銀行制度の整備以前においては、商品流通にともなう、商品担保金融は制度的に未熟であった。^③地域内や地域間の取引の拡大のためには、集散地で、商人が商品担保金融を利用できる体制の構築が不可欠である。それらの商人が商品担保金融の提供者の位置にとどまらず、利用者となることが、取引の規模を拡大させる一因である。本稿では、農村市場における商品担保金融のあり方の推移を、一商人が残した銀行などの、金融関係の証書類を検討することにより把握し、その特徴を説明してゆきたい。

ここで、商品担保金融に着目する観点から、商家の金融関係文書を検討することの意義に触れておきたい。加藤俊彦氏は、明治初年の米穀商品化と銀行設立との関係について、次のように評価している。「まず、明治政府は、官金を取扱う商人資本を利用することによって、一方においてとにかく政府の貨幣収入を確保しつつ他方米穀の商品化を促進することにつとめた。また、明治政府の金融機関の設立にたいする熱意も、一面においては、この米穀の商品化を促進しようとする意図と一脈の関

連をもっているように思われる」。⁽⁴⁾同氏は、先収会社・三井物産と三井銀行が協力しつつ、荷為替手形を利用し、実際には地方産米の買い上げをおこなっていたと述べ、また、第一国立銀行についても同様の取引があったのではないかと記している。ただし、同氏は明治十年代以後には大商人資本の活躍が少なくなること指摘し、「生産地に於ける米穀商人と消費地における米穀商人の機能的分離」がおこった後の事態については「別の機会に考察したい」と述べている。⁽⁵⁾

加藤幸三郎氏は、その論文、「明治・大正期における米穀流通と地方銀行の展開」において、米穀流通の時代的な変化の諸相を述べつつ、地方銀行の関与を論じている。ここで同氏が「貨車積」輸送の発達と、地方銀行による「倉荷証券」担保金融や「手形割引」金融業務の発生を結び付けていることが注目される。⁽⁶⁾鉄道輸送は、旧来の回船問屋や倉庫業者による金融の利用を困難にするからである。秋田県下の銀行と米などの農村商品の流通の関係について、加藤幸三郎氏は、秋田県下の銀行の発達過程について考察し、銀行の階層差や秋田県と他の東北諸県との性格の差異を産業の構成と対応させて論じている。同氏によれば、秋田県の銀行は、岩手県・青森県の銀行と同様の性格を持つ。⁽⁷⁾また、浅井良夫氏は、安田銀行が明治二十九年に、第一国立銀行の秋田県下の支店網を引き継ぎ、県内で取引を展開していく様相を説明している。⁽⁸⁾さらに、伊藤正直氏は、大正・昭和期における秋田県下の銀行が秋田・第四十八の両銀行と他の小銀行の格差を検証した上で、小銀行群である「地方的地方銀行」の経営の実態を解明し、それらの銀行と米取引の推移が密接な関係があることを明らかにしている。⁽⁹⁾これらの各氏の研究は銀

行の側から見た金融と農村商品流通との関係であるが、本稿では、米などの農村商品の流通の側から見た、商品担保金融の展開過程を見てゆきたい。⁽¹⁰⁾

ここで取り上げる商人は秋田県平鹿郡増田町の石田家である。同家は、江戸時代以来の豪商であり、平鹿、雄勝郡の特産物の集荷の担い手であった。その取り扱い商品は、江戸時代から明治初年にかけては煙草が多かったが、明治期以後、政府が煙草を専売の対象として統制を強めてゆくに連れ、米や生糸の比重が増していった。石田家の取り引きについては、在郷商人論の展開の中で、研究がなされている。⁽¹¹⁾

二 石田家をめぐる商品取引と金融の環境

石田家は江戸時代から明治初年にかけては、煙草を主要な取扱い商品としていた。しかし、煙草については、明治二十九年には葉煙草専売法が制定され、三十一年から施行された。また、明治三十七年には、煙草の製造自体を国の手でおこなう、煙草専売法が公布された。葉煙草専売法案の成立以前も、煙草税則の厳格な適用があり、煙草の卸売業者は、煙草以外の商品販売も手掛けるように変わっていった。⁽¹²⁾石田家も明治十年代以後、煙草以外に米・生糸・真綿などを売買していたが、葉煙草専売制の実施後は、これらの営業に転換した。また、専売局と提携して、煙草の小売の元売り捌きもおこなった。明治三十五年には商品の卸売部門を会社組織とし、石田合名会社を成立させた。ここで、石田家の取扱商品と商品流通の流れに注目しておきたい。まず、煙草は雄勝郡の村々

から集め、増田近辺や、県内外の加工業者に販売していた。生糸や真綿も同様である。しかし、米については様相が異なる。石田家は地主でもあったので、小作米が入る。集荷した米や小作米を江戸時代には、土崎の杉山・田牧・上善などの商人に販売している。¹³⁾また、明治期に入っでは、増田町の石田政吉にまとめて販売している。¹⁴⁾しかし、これらは、石田家の米取引の一部にすぎない。煙草や生糸を産出する雄勝郡は畑が多く、水田は少なかった。このため、石田家は煙草等を集荷する相手の農民に対して、貸付の形で、米の供給を行っていた。これらは、金銭の貸付と合わされ、石田家の各農民に対する債権となった。この見返りは金銭による返還や煙草、生糸などの生産物による返済であった。いま、明治十五年と二十五年の大福帳より、小安湯元の市川三左衛門への米の貸付を見れば、表1-2のようになっている。また、明治十年代の万売帳によれば、貸付によらず、直接販売する例があったことも確認できる。すなわち、石田家は時には、土崎の商人を相手にした米の販売をするものの、恒常的には、近隣に、集荷した米を供給する機能を担っていたのである。石田家が煙草や生糸の集荷を行った雄勝郡の各村々は、山間部で、米の産額が少なく、江戸時代から、商品作物栽培が盛んであった。明治三十三年の石田合名発足直前の石田家の所得金高申告書によれば、同年の同家の貸付金は二四〇〇円、卸売金額は四二五〇円になっていた。¹⁵⁾また、同家には、煙草売買以来の倉庫があり、煙草卸売の廃業後は、米などの保管をおこなっていた。この石田家の、銀行などの金融機関利用の形態と商品取引の性格が、ここでの問題である。

石田家の金融機関利用を考察する前提として、秋田県における銀行制

度の展開について見れば、明治十二年に秋田市に第四十八銀行が設立され、預金や貸出、また官、民を相手として為替金の振り出しや受け入れを行っている。また秋田市には、第一国立銀行の秋田支店があり、第四十八銀行と営業を二分していた。銀行の手形に関する営業としては、割引手形・荷為替手形・代金取立手形があり、十年代初頭以来営業が行われていたが、明治十年代においては、第一国立銀行の秋田支店は、第四十八国立銀行と比べれば、貸出について、割引手形については一〇〇倍の量があり、荷為替手形については、五〇倍の量があったが、代金取立手形については、半分となっていた。このような格差は年代とともに縮小してゆく。秋田県における二つの銀行の体制は、明治二十六年まで続いた。明治二十七年には、大曲銀行・本荘銀行・横手銀行・平鹿銀行・大久保銀行が設立された。¹⁶⁾また、明治二十九年には第一国立銀行秋田支店は閉店され、その営業を受け継ぐ形で、安田銀行秋田支店が開設された。表3に見るように、明治二十年代後半以後には、秋田県内に銀行が多数設立されるようになる。これらの銀行の手形による貸出と取立は表4のようになっている。これらの内の、割引手形と荷為替手形が商品担保金融に該当する。

三 商品担保金融の実態

ここで、石田家の金融関係の証書を見て、その内容を確認しておきたい。石田家に残された証書では、明治十八年の、第一国立銀行からの米・生糸を担保とする金融が時期が早いものである。まず、米を担保と

する金融についての証書は次のものである。

米預証文

一秋田産米五百五拾俵也

此石数

平鹿郡増田村百三拾七番地所有蔵入

右ハ貴行ヨリ金五百円借用仕候ニ付抵当トシテ差入置候分正ニ預置候然ル上ハ水火盜難其他之損害ニ係ル事有是候共拙者ニ於テ弁償致シ聊貴行へ迷惑相掛ケ申間敷候尤モ右米貴行ニ於テ御検査有是節ハ何時ニテ御立会可申候依テ米預証如件

秋田県平鹿郡増田村

米預主

明治十八年二月廿七日

石田四郎兵衛 印

松浦文吉 印

同郡同村

引受証人

石田太吉 印

横手第一国立銀行出張所

御中⁽¹⁾

これは、石田四郎兵衛と松浦文吉が連名で借りた五〇〇〇円の抵当として、石田四郎兵衛らが、自ら、米五五〇俵を預かっていることを記し、引受

人が証明する形態の証書である。このような商品の預証文は、通例、借用金証書と一对のものであり、第一国立銀行の米についての借用金証書は残っていない。しかし生糸を抵当とする借用金証書は残っており、次のようなものである。

借用金証書

一金七百元也

利子年割五歩定

抵当品生糸 四拾五貫目也

前書之金員荷為替前借トシテ借用申処実正也右金御返済之儀ハ明治十八年九月三十日限元利無相違返済可仕候万一期限ニ至リ返済相滞候ハ、書面抵当品ハ其銀行へ御引上被成御勝手ニ御売払之上右代金ヲ以元利御取立被成若シ過金有之候ハ、御渡可被成候若シ又不足金相立候ハ、借主諸有品御取押之上売払代金ヲ以テ御計算被成尚右ニテモ不足ニ候ハ、連印之引受証人ヨリ弁償仕候毫モ其銀行へ御損耗相掛ケ申間敷且ツ期限中抵当品実価低下之節ハ銀行之望ニ応シ入金又ハ増抵当差入可申候將又此抵当品ニ付万一非常之変質故障有之候ハ、本人ハ不及申引受証人ニ於テ屹度引受弁償仕候為後日金借用証書如件

但シ証書抵当品共期限中ハ其銀行御都合ヲ以テ預金其他之抵当トシテ他方へ御差出ニ相成候共拙者ニ於テ申分無之候

秋田県平鹿郡増田村

金借用主

明治十八年八月四日

石田四郎兵衛 印

松浦文吉 印

同郡同村

引受証人

石田太吉 印

横手第一国立銀行出張所

御中⁽¹⁸⁾

この借用金証書には、生糸の預証書が一对の書類として存在している。この借用金証書は、荷為替の前借としての形態を持っている。この横手第一国立銀行出張所の商品担保金融の形式は、当時の商品担保金融一般の模範になったと思われる。それは、石田四郎兵衛・松浦文吉が連名で新潟県の民間業者から米を担保として七〇〇円を借用した際の証書が、上記の証書と酷似している点から推測できる。それらは以下のものである。まず、借用証書は次のものである。

金借用証書

一金七百円 但シ利子年壹割六分日割之定

前書之金額正ニ借用申処実正也右返済之儀ハ本年九月三十日限り元利無相違返済可申候（若借用主他行中期限相満チ候ハ、本人ニ不拘引受証人ニ於テ屹度返済可仕候）萬一期限ニ到リ返金相滞リ候ハ、書面抵当品御引上被成御勝手ニ御売払之上右代金ヲ以元利并ニ右ニ関^マシル一切之費用御引去可被成候若シ右ニテモ不足相生シ候ハ、借主并ニ引受証人ニ於テ屹度返済可仕候且ツ期限中抵当品実価低落候得ハ貴殿之望ニ応シ入金又ハ増抵当差出シ可申候勿論此抵当品ニ変災ニ羅リ候カ他

ヨリ故障等有之候ハ、期限内ニ拘ハラズ借主并ニ引受証人ヨリ元利返済可仕候為後引受証人連署借用金証書如件

明治十八年七月七日

秋田県平鹿郡増田村三百七拾九番地

同県同郡同村

金借用主 石田四郎兵衛 印

同 松浦文吉 印

同県同郡同村

引受証人 石田太吉 印

新潟県越後国村上羽黒町

百武長兵衛殿

明治十八年八月三日返済⁽¹⁹⁾

米の預証書は次のものである。

米預証文

一秋田産米七百俵也

此石数

平鹿郡増田村百三拾七番地所有蔵入

右ハ貴殿ヨリ金七百円借用仕候ニ付抵当トシテ差入置候分正ニ預置候然ル上ハ水火盜難其他之損害ニ係ル事有是候共拙者ニ於テ弁償致シ聊貴殿ヘハ迷惑相掛ケ申間敷候尤モ右米貴殿ニ於テ御検査有是節ハ何時ニテ御立会可申候依テ米預証如件

明治十八年七月七日

秋田県平鹿郡増田村

米預主

石田四郎兵衛 印

松浦文吉 印

同郡同村

引受証人

石田太吉 印

新潟県越後国村上羽黒町

百武長兵衛殿⁽²⁹⁾

これらの証書は先に見た第一国立銀行の証書と、文章の細部にいたるまで、酷似している。第一国立銀行の融資の地方商人に与えた影響の強さがわかる。ただし、生糸を担保とした第一国立銀行の借用証書には、荷為替の前借との記載があったが、米を担保とする百武からの借入には、その記載がなく、この貸借には米の売買が伴っていない点が異なっている。また、鉄道開通以前に、秋田と新潟の地方商人同志が、米を担保として、資金の融通を行い、取引関係にあったことが注目される。なお、百武長兵衛が石田四郎兵衛らに資金を貸与するにあたって、不動産抵当金融の形態をとることを考えたことが、借用証券の見本からわかる。⁽²⁹⁾

なお、石田家と近隣の農民の間では、土地抵当金融が一般的であった。石田らと百武の貸借関係においては、荷為替の前借ではなく、商品を担保とする貸借であったが、第一国立銀行以外の銀行と、石田家または石

田合名会社との取引においては、荷為替手形の前借ではない証書のみが残っている。次の、明治三十六年の石田合名会社と五業銀行の取引は、その例である。

第 号

一金参百円也

右金額明治三十六年九月二十日限り貴殿又ハ貴殿ノ指図人へ此手形引換ニ無相違支払可申候也

明治三十六年六月二十三日

平鹿郡増田町

石田合名会社 印

代表者 石田太吉 印

合名会社五業銀行御中⁽²⁹⁾

これは約束手形の用紙に、印紙貼付の上、記載されたものである。この約束手形には、米預証が付されている。それは次のものである。

米預証

一 玄米三斗入壹百俵也

右石田合名会社ヨリ担保トシテ差入候分保管之為メ預リ置キ候処明白也何時ニテモ此証書持参ノ者へ引替ニ相渡可申候為後日預リ書一札如件

明治三十六年六月二十三日

平鹿郡増田町

石田四郎兵衛 印

同郡横手町

合名会社五業銀行御中⁽²³⁾

この約束手形は裏書されず、同年の六月二十六日に五業銀行に対して支払いがなされている。これは、借用期間は短いとはいえ、米を担保とする借用であるといえる。上に見た例は、商品預り証書が約束手形に添付された例であるが、約束手形に次のような担保品添証が付された例もある。

担保品添証

一葉煙草参拾個 但拙者蔵預リニ致候分

此量目式百四拾貫

右ハ明治三十三年七月十八日付第⁽²⁴⁾号約束手形明治三十三年九月三十日支払ノ担保品トシテ差出置申候就テハ支払期日ニ至リ万一支払不致候得者貴方ニ於テ右ノ担保品ハ御売却ノ上其代金ノ内前書ノ手形金額及期日後ノ延滞利子則チ金百円ニ付一日金⁽²⁵⁾ 錢⁽²⁶⁾ 厘宛ノ割合ヲ以テ御引去り可被下候其節不足相生シ候ハ其不足分ハ速ニ相償ヒ可申候依テ添証如件

明治三十三年七月十八日 平鹿郡増田町

石田四郎兵衛後見人

石田太吉 印

羽後国横手町

合名会社 五業銀行⁽²⁴⁾

約束手形の振り出しが商品を担保として銀行に差し出した上で行われることは、まさに商品担保金融に他ならない。このような形態の融資は他の銀行についても見られる。次の事例は秋田銀行に関するものである。

預り証

一玄米 参斗入式百俵也

右ハ秋田県平鹿郡増田町増田参百八拾壹番地石田久兵衛ガ明治四拾年参月参拾日振出第壹号約束手形金ノ支払保証担保トシテ貴行へ差入レ候分拙者ニ於テ保管預リ置キ候ニ付何時タリトモ貴行之御指図ニ従ヒ現品御渡可申上候為後証預リ証依テ如件

追証石現品ニ係ル蔵敷料其他ニ費用ハ一切石田久兵衛負担ノ事

秋田県平鹿郡増田町増田四百八番地

石田合名会社

代表人 石田太吉 印

明治四拾年参月参拾日 印

株式会社秋田銀行横手支店御中

記

右玄米参斗入式百俵也本証引替本人へ御渡被下戻候也

明治四拾年六月廿七日

株式会社秋田銀行横手支店 印

石田合名会社御中⁽²⁵⁾

末尾の「記」以降は、融通した金額を返済した後、銀行が預り主に対して、借り手への担保品の返還を依頼している記載である。また、石田家は約束手形による金融を通例の借入とあわせて、活発な金融活動を行っていた。次の文書はその一例を示すものである。

明治三十三年九月二日

御状拝見候陳ハ御申越ニ依リ左之通り取計へ申候

一金千円也

次送金之分

一金七円貳拾錢也

貳百円手形返戻利子分

メ

内金八百円

秋田市伊勢屋送金分

内金貳百円

手形ニテ御用達分

内金八拾錢也

八百円要スル秋田へ送金手数料

メ

差引六円四拾錢御返シ申出候

右御差引被下為候勿々拝復

石田四郎兵衛様

五業銀行⁽²⁶⁾

これによれば、石田家は五業銀行に対して、秋田市の伊勢屋に八〇〇円の送金を依頼している。これと約束手形による借入金を支払う順序を述べているのが、上記の書簡である。以上の各銀行と石田家との取引を示す証書から、荷為替の前借、米などの商品を担保とする、約束手形の

振り出しによる借用、銀行以外からの借用の存在の諸相がわかった。

四 商品担保金融の展開

ここで、石田家の残された証書類をまとめて、商品担保金融の展開過程の特徴を見ておきたい。まず、約束手形の利用による金融を含めた、石田家と、石田合名の銀行利用のあり方を表にしたのが、表5-8である。これらによれば、石田家は、年代によって取引相手の銀行が変わっていることがわかる。五業銀行との取引が明治三十年代に行われ、次いで、増田銀行との取引がこれに次ぎ、明治四十年代には、秋田銀行横手支店と取引を行っている。

まず、第一国立銀行横手支店との取引を見れば、石田四郎兵衛と松浦文吉が第一国立銀行と行った取引に関する書類が、明治十七年と十八年の分が五件残っている。これらは、不明分もあるが、米と生糸を担保とする、借用証書を差し出している借用であった。さきに見たように、借用金証書には荷為替手形の前借である旨が記されていた。それらは、いずれも生糸を担保とするものである。米に関しては、米預証文のみが残されている。

明治二十年代の証書には、銀行からの借入れに関するものは残っていない。この時期の金融に関して目立つのは、秋田県内一の土地所有者であった池田家からの借入れである。⁽²⁷⁾ その様子は表9の通りである。一、二年間の期限の融資が多く、年々、利子のみを支払い、借り替えを続けていたことがわかる。この池田家からの借入は無担保であった。池田家

からの借入れは三十年代に入ってから続く。三十年代には、県内の各銀行からの借入れの証書が残存する。この時期には、大地主からの無担保融資が、銀行からの融資と組み合わされていたのである。このように、石田家は銀行からだけ必要な資金を調達していたわけではなかった。さらに秋田市の伊勢屋との関係を資料に見たが、伊勢屋から石田家は表10のように、借入金があった。これらも、無担保であった。また、石田家は、五業銀行や私人から、公債を借入している。(表11・12)

明治三十年代には、五業銀行、増田銀行からの借入れが目立つ。また、四十年代には、秋田銀行横手支店からの借入れも証書に現れる。これらの銀行からの借入れの殆どは、商品を担保とした、約束手形による借用である。担保とされた商品については、五業銀行については、三十年代前半においては、生糸が目立つが後半には米が多くなる。増田銀行については、米、大豆、生糸となっている。また、秋田銀行横手支店については、米と生糸が多い。秋田銀行との取引は明治四十年代以降のものであるが、米のなかで、外国米が多くなっていることが注目される。石田家が江戸時代以来、明治期にいたっても、雄勝郡を中心とする畑作地帯への米の供給者としての機能を担っていたことを考えれば、この外国米は、秋田県内での需要のために移入したものであることが推測できる。

これらを見れば、産地商人と銀行との貸借関係で、約束手形を用い、商品を担保とする形態が一般化していたことがわかる。裏書があるものは、秋田銀行と石田四郎兵衛の間の貸借に見られる。しかし、これらはいずれも、当初の払込先が石田合名であり、裏書先が秋田銀行横手支店である。従って、これらは石田四郎兵衛が秋田銀行から、約束手形に

よって借用したのと同じである。これら以外に、裏書された約束手形はなかった。また、表13は、秋田銀行の約束手形割引の計算書を集計したものである。石田家は自ら振り出した約束手形を、払込先の銀行で割引いているのである。

銀行による金融の実施と大地主や商人による金融活動との差異は、石田家の事例に見られるように、担保の有無であった。もともと、銀行の手形による貸付についても無担保のものもあったが、それらは、支払いに際して、問題をおこすことがあった。商品担保金融の実施、特に約束手形による貸付は、銀行が商品に対する担保価値を設定することが前提である。返済が滞った場合に販売可能な価格を推測しなければならず、担保価値の高下は、実際の商品価格と相互に影響を与えあう。実際、石田家が米や生糸を担保として借り入れる場合の金額は、時期年代によって変化していることが見てとれる。石田家は、銀行から借入をし、商品を集荷し、生糸などは地域外に移出し、米を近隣農村に供給していた。供給の方法には、貸付と販売があったが、いずれにしても販売価格の設定が行われる。同一地域で、銀行が関与する価格設定があれば、商人と零細農民との米の取引に対しても、その動向は波及してゆく。地域における価格動向や担保価値の動きとかけ離れた価格が米取引で呈示されれば、購入者は、他の購入ルートを探すからである。このような意味で、末端産地近辺の米の需要地における商人の金融活動に、いくつもの銀行が関与し、米の担保価値の査定をおこなっている事実は、農村市場の米価決定に影響を与えているといえよう。

五 結 び

以上の商品担保金融の考察をここでもまとめておきたい。まず、石田家に関しては、約束手形の振り出しが商品担保金融のなかで重要な位置を占め、零細な地方銀行を支払い場所とする約束手形は、裏書による譲渡や移動は少なく、それらの銀行の、約束手形の振り出し人に対する資金の貸出に他ならないことがわかった。石田家の銀行からの借入れは、明治十年代の第一国立銀行からの借入れを除いて、商品を保保とした約束手形によるものが大部分であった。大正五年に、手形貸付が、割引手形からはずれ、独自の勘定として銀行の会計処理に登場したこととその影響について、既に指摘がなされているが、そのような会計処理が正当化される根拠は、商品担保による約束手形の発行が、証書による貸付と区別したい性格をもっていたことによるものと思われる。⁽²⁸⁾

石田家が振り出した約束手形にも商品担保によらないものがあつたが、その場合には、連帯保証を行う人名が連署されていた。そして、手形の決済時点で、その支払いをめぐる問題となるのは、このような商品担保によらない金融であった。また、そのような手形の最終的な保証は、不動産であつた。金融機関以外の大地主による無担保の融資も、このような借り手の不動産などの財産が、保証していたものと考えられる。⁽²⁹⁾

表4によれば各銀行とも荷為替手形や代金取立手形の振り出しが多いが、石田家に残存する証書類にはそれらは少ない。これは、石田家が、米に関しては、近隣の雄勝郡の各村への供給者の位置にたち、その販売は規模が零細であり、手形による取引の必要がなかったことによるので

はないかと考えられる。このような、米の需要地帯の存在は、米の単作地帯が多い秋田県内においても例外ではなく、雄勝郡のみならず、北秋田郡や山本郡についても当てはまる。北秋田郡については、大館近郊の二井田村の一関家が、近隣の農家に米の販売を行っていたことは、既に紹介されている。⁽³⁰⁾ また、米の単作地帯においても、飯米の購入を必要とする零細農家が存在する。さらに東北地方のみならず、西日本の大地主が近隣住民に、米の販売を行っている事例も知られている。⁽³¹⁾ このように、米は遠隔地に対してのみ販売されるのではない。そしてまた、このような近隣への米の供給者は、米の集荷に際し、購入を行うこともあり、集荷した米を保保として、金融機関からの借入をおこなうことがあつた。石田家の証書に荷為替金融関係が少なく、米などの商品を担保とする約束手形の振り出しが多いのは、このような理由によるものと考えられる。従つて、秋田県のような、米の移出地帯に関しても、県内などの近隣地域での需要に対する金融も無視しえず、県外への移出や、鉄道輸送とのみ、商品担保金融を結び付けるのは一面的ということになる。このような農村市場での米穀需給に対する、銀行による融資の介在は、担保価値の設定を通じて米価に影響を与え、商人や地主による市場支配を、困難にするものであるといえよう。個々の零細な銀行の活動地域は限定されていたとはいえ、石田家のように、多数の銀行との取引がなされれば、銀行が関与するにいたつた米穀市場の地域性は、取引地域の限定があるにしても、克服されていくといえよう。農村市場での米穀需給は、他地域への移動を前提にする取引はもちろんのこと、米の移動距離が短い局地的な取引が多い商人と農民の取引にあつても、広範な地域で

の米穀需給や米価動向と無関係ではありえず、またそのような地域間の連動の一因を、銀行による商品担保金融の盛行が担っていたといえよう。³²⁾

註

- (1) 増田村は明治二十八年に町になった。雄勝郡の経済構造と、増田村の商人による流通支配の実態については、国安寛「雄勝郡成瀬沢目の経済構造」(『秋田地方史論集』、みしま書房、一九八一年所収)に詳しい。
- (2) 国安寛「商品生産と流通」(秋田県編『秋田県史』第三卷、一九七七年所収)参照。
- (3) 明治初年の米をめぐる商品担保金融の性格については、加藤俊彦「地租金納化と米穀の商品化についての覚書」(宇野弘蔵編『地租改正の研究』下、東京大学出版会、一九五八年所収)参照。明治八年の小野組破綻に際し、青森港に貯蔵されていた米が第一国立銀行に抵当に出されていたが、この米をめぐる、大阪裁判所ほかの小野組に対する債権者が所有権を主張し、第一国立銀行と争いになったことは、既に紹介した。拙稿「明治初年における小野組支店の為替方活動について―青森県為替方の機能をめぐって―」(『年報市史ひろさき』五、一九九六年所収)。この事例は、明治初年の商品担保金融の危うさを示している。林玲子「醤油醸造業と為替手形」(同編『醤油醸造業史の研究』、吉川弘文館、一九九〇年)は、江戸―銚子間などの為替手形の流通を分析しているが、手形流通の活発さと、両替商的な機能を持つ媒介者の存在が必要であることが明らかにされている。近代における銀行の発達には、手形流通を円滑にするものであることがわかる。
- (4) 加藤俊彦前掲稿、一五八頁。
- (5) 同右稿、一九三頁。
- (6) 加藤幸三郎「明治・大正期における米穀流通と地方銀行の展開」(『地方金融史研究』一、一九六八年所収)。
- (7) 加藤幸三郎「明治・大正期における秋田銀行の展開―奥羽(北海道)・秋田県両銀行同盟会」資料よりみたる―」(『地方金融史研究』四、一九七一年所収)。

- (8) 浅井良夫「戦前期日本における都市銀行と地方金融―安田銀行支店網とその系列銀行に関する分析―」(『金融経済』一五四、一九七五年所収)。
- (9) 伊藤正直「水田単作地帯における「地主的地方銀行」群の衰退過程―大正昭和初期の秋田県を対象として―」(『金融経済』一五九、一九七六年所収)。
- (10) 本稿で取り扱うのは商家をめぐる、米ほかの商品流通に関わる金融に限られるが、山口和雄氏や石井寛治氏・高村直助氏・中村政則氏、杉山和雄氏らによつて製糸業・紡績業・織物業などに関し、生産過程まで含めた金融関係の総体が、産業金融史研究として解明されていることは周知である。
- (11) 石田家については、国安氏の前掲稿のほか、半田市太郎「秋田藩における商品生産の展開」(東北大学『歴史』七、一九五四年所収)、大山茂「秋田藩における商品生産の形態―特に真生産を中心に―」(『秋大史学』六、一九五五年所収)、松淵真洲男「近世―在地商人の経営―」(『秋田近代史研究』八、一九六三年所収)、拙稿「明治前期の煙草生産地帯における商人活動―秋田県平鹿郡増田村石田家の事例―」、『弘前大学経済研究』一八、一九九六年所収)参照。
- (12) 石田家の煙草取引とそれをめぐる政府の取締の様子については、前掲註(11)拙稿参照。
- (13) 幕末の、これらの商人に対する売り仕切りが、少数ながら、石田家に残存している。
- (14) 石田家、明治十五年「万売帳」。
- (15) 『秋田県統計書』各年次による。
- (16) この所得金高は、前掲拙稿で紹介した。なお、明治三十五年に石田合名会社が設立され、石田家が近隣農民などに対して持つ債権が会社に移渡された。
- (17) 1(20)これらはいずれも石田家所蔵史料である。なお、明治前期の生糸を担保とする金融の全国的な動向については、鶴見誠良「日本信用機構の確立」(有斐閣、一九九二年)および、中林真幸「製糸資本勃興期の金融」(『史学雑誌』一〇三―四、一九九四年)所収参照。
- (21) この見本は以下のようになっている。
耕地宅番書入金借用証券

一金何百円也 但利子金拾円ニ付壹ヶ月金何拾銭宛之定

此抵当

羽後国何郡何村字何々何番

何郡何村持主

一田何反何畝何歩

何之誰

此地価金何拾円也

羽後国何郡何村字何々何番

何郡何村持主

一田何反何畝何歩

右同人

此地価金何拾円也

合計反別何程

合地価金何程

右之耕地書入前書之金額正ニ借用申所実正也右返済之儀ハ明治何年何月何日限元利無相違返済可仕候（若又借主他行中期限相満チ候ハ、本人ニ不拘引受証人ニ於テ屹度返済可仕候）萬一期限ニ至リ返金相滞リ候ハ、書面之抵当物売却之委任状速ニ御渡可申ニ付貴殿ニ於テ御売上之其代金ヲ以テ元利并ニ右ニ関スル一切之費用御引去可被成候若シ右ニテモ不足相生シ候ハ、借主并ニ引受証人ニ於テ屹度返済可仕候且ツ期限内中抵当品実価低落候時ハ貴殿之望ニ応シ入金又ハ増抵当差出シ価申ハ勿論此抵当品変災ニ罹リ候カ若クハ他ヨリ故障等申出候節ハ期限内ニ拘ハラス速ニ借主并ニ引受証人ヨリ元利返済可仕候為後日引受証人連署借用金証書如件

年号月日

秋田県何郡何村何番地

金借用主 何之誰

同伴同郡同村何番地

引受証人 何之誰

同伴同郡同村何番地

同 何之誰

新潟県越後国村上羽黒町

百武長兵衛殿

この証書の見本に沿った金銭の貸借に関する史料は残っていないので、百武と石田らの間では、米を抵当とする貸借だけが行われたのではないかと思われる。

(22) (27) 石田家所蔵史料。但し、印紙、割印や取引の終了後の抹消の墨の線は省略した。

(28) 前掲註(7) 加藤幸三郎稿。

(29) 大正二年に、石田四郎兵衛・石田太吉・高橋文太郎が連名で振り出した約束手形は期限内に決済できず、増田銀行の要請により、石田四郎兵衛と石田太吉が連名で、借り替えをおこなっている。この際、石田家と石田合名の所有田畑に、増田銀行によって、根抵当権が設定された。

(31) 拙稿「近代の秋田地方における商人活動の一側面」（『秋田近代史研究』二八、一九八四年所収）、二九頁。ただし、これは部分的な紹介にすぎない。しかし米販売の事実の存在は確認できる。全体像については、別に論じたい。

(32) 例えば、岡山県の野崎家について、詳細な分析がなされている。ナイカイ塩業株式会社編『備前児島野崎家の研究』（山陽新聞社、一九六七年、五〇五頁等。野崎家は時の相場により、小作米を店員や浜子に販売している。

(32) 守田志郎氏はその著書『地主経済と地方資本』（御茶の水書房、一九六三年）において、地主と銀行、地主と米販売の関係を論じているが、米販売と銀行との関係には触れるところが少ない。同『米の百年』（御茶の水書房、一九六六年）では鉄道による米輸送と、地方銀行の商業金融の積極化、米商人の銀行依存の高まりとの関係が強調されている。

付記

本稿で使用した石田家所蔵史料の利用にあたって、石田家御当主石田廣太郎氏をはじめ、石田家の皆さんの便宜をえた。また、同家史料の閲覧は、文部省科学研究費補助金（平成元年度、総合研究A、代表・佐々木潤之介氏）の交付によって可能になったものである。記して謝意を表したい。

（こいわ・のぶたけ 東京水産大学教授）

表1 明治15年度石田家米貸し（市川家あて）

年 月 日	俵 数	価格（円）
15. 6. 23	1	1.5
15. 6. 29	1	1.42
15. 8. 1	1	1.65
15. 9. 17	1	1.9
15. 10. 21	1	1.7
合 計	5	8.17

（出典）石田家『大福帳』より抜粋

表2 明治25年度石田家米貸し（市川家あて）

年 月 日	俵 数	価格（円）
25. 2. 12	3	5.55
25. 4. 12	2	3.7
25. 4. 17	4	7.4
25. 5. 7	2	3.7
25. 5. 9	2	3.7
25. 6. 5	3	5.7
25. 6. 10	2	4
25. 7. 21	3	5.94
25. 12. 31	1	1.55
26. 1. 1	3	4.65
合 計	25	45.89

（出典）石田家『大福帳』より抜粋

表3 明治35年時点、秋田県下の銀行

名 称	本店所在地名	創立年月日(明治)	支店数	株金(円)	積立金(円)
合名会社沢木銀行	南秋田郡船川港町	30. 1. 9	2	0	22000
合名会社能代銀行	山本郡能代港町	31. 3	0	0	3248
合名会社大久保銀行	山本郡能代港町	30. 11. 1	1	0	10000
株式会社本荘銀行	由利郡本荘町	28. 8	0	50	20000
株式会社大曲銀行	仙北郡大曲町	27. 5. 27	0	50	32000
株式会社池田銀行	仙北郡刈和野町	33. 7	0	0	0
株式会社平鹿銀行	平鹿郡角間川町	26. 7	0	50	54000
株式会社増田銀行	平鹿郡増田町	28. 3	0	500	100
合名会社五業銀行	平鹿郡横手町	20. 5	0	0	12800
近合名会社	平鹿郡植田町	33. 1	0	0	3250
戸田銀行	平鹿郡浅舞町	33. 8	0	0	7700
合名会社湯沢銀行	平鹿郡湯沢町	30. 3. 3	0	0	0
株式会社雄勝銀行	平鹿郡湯沢町	30. 8. 3	0	25	0
株式会社雄勝貯蓄銀行	平鹿郡湯沢町	32. 11. 7	0	20	1950
株式会社第四十八銀行	秋田市栄町	12. 1	3	50	21671
株式会社秋田銀行	秋田市大町	29. 5	1	50	77000
株式会社秋田農工銀行	秋田市大町	31. 7			

（出典）『秋田県統計書』

表4 関係銀行の手形取扱

		明治年	27	31	35
第一銀行秋田支店	割引手形	貸 出	1090.4		
		取 立	0.0		
	荷為替手形	貸 出	705.9		
		取 立	208.4		
	代金取立手形	貸 出	2.7		
		取 立	106.2		
秋田銀行	割引手形	貸 出		707.3	21979.5
		取 立		244.1	2117.3
	荷為替手形	貸 出		452.4	1731.9
		取 立		463.7	1027.2
	代金取立手形	貸 出		46.5	498.6
		取 立		83.2	599.4
増田銀行	割引手形	貸 出		35.7	2.7
		取 立		0.0	1.3
	荷為替手形	貸 出		710.0	116.4
		取 立		0.0	18.0
	代金取立手形	貸 出		1.5	1.2
		取 立		228.0	1.4
五業銀行	割引手形	貸 出		72.7	52.2
		取 立		7.0	55.9
	荷為替手形	貸 出		40.3	118.5
		取 立		7.4	57.7
	代金取立手形	貸 出		2.9	45.4
		取 立		23.8	2.2

（出典）『秋田県統計書』各年、1）単位、千円

表5 第一国立銀行横手出張所の石田家金融

明治年月日	氏 名	払込先	金額(円)	利 子	返済期日	種 類	担 保	量	備 考
17. 8. 18	石田四郎兵衛、松浦文吉	本 人	500	1.5割(年)	17.10.10	借入金証書	生糸	10貫	
17. 8. 28	石田四郎兵衛、松浦文吉	本 人	200	1.5割(年)	17.11.20	借入金証書	生糸	12貫	
18. 2. 27	石田四郎兵衛、松浦文吉	本 人	500			米預証文	米	550俵	秋田産上米
18. 8. 4	石田四郎兵衛、松浦文吉	本 人	700	1.5割(年)	18. 9. 30	借入金証書	生糸	45貫	荷為替前借
18. 5	石田四郎兵衛、松浦文吉	本 人	500			米預証文	米	550俵	秋田産上米

(出典)石田家所蔵史料

表6 秋田銀行横手支店の石田家金融

年 月 日	氏 名	払 込 先	金額(円)	利 子	返済期日	種 類	担 保	量	備 考	裏 書 先
明治40. 3. 30	石田幸之助	秋田銀行横手支店	不明	不明	不明	預り証(約束手形)	玄 米	200俵	石田合名(石田太吉)預り	なし
40. 4. 19	石田幸之助	秋田銀行横手支店	2000	不明	40. 7. 20	預り証(約束手形)	玄 米	300俵	石田合名(石田太吉)預り	なし
40. 7. 20	石田幸之助	石田合名(石田太吉)	2000	不明	40. 7. 20	預り証(約束手形)	外国米	140袋	石田四郎兵衛預り、連帯保証	秋田銀行横手支店
40. 7. 24	石田四郎兵衛	石田合名(石田太吉)	700	9.4円	40.10.24	預り証(約束手形)	外国米	140俵	石田合名(石田太吉)預り	秋田銀行横手支店
40.10.19	石田幸之助	石田合名(石田太吉)	2000	不明	41. 1. 20	預り証(約束手形)	生 糸	9貫	石田合名(石田太吉)預り	秋田銀行横手支店
40.11.30	石田合名(石田太吉)	秋田銀行横手支店	800	0.21円	41. 1. 30	預り証(約束手形)	外国米	140袋	石田合名(石田太吉)預り	秋田銀行横手支店
41. 1. 20	石田幸之助	石田合名(石田太吉)	2000	不明	41. 4. 20	預り証(約束手形)	玄 米	300俵	石田四郎兵衛預り	秋田銀行横手支店
41. 4. 19	石田幸之助	不明	2000	不明	不明	預り証(約束手形)	外国米	140袋	石田合名(石田太吉)預り	秋田銀行横手支店
42. 3. 22	石田合名(石田太吉)	秋田銀行横手支店	1500	不明	42. 6. 15	預り証(約束手形)	外国米	140袋	石田四郎兵衛連帯保証	秋田銀行横手支店
42. 3. 31	石田久兵衛	不明	1000	不明	不明	預り証(約束手形)	玄 米	450俵	石田四郎兵衛預り	
42. 4. 20	石田幸之助	秋田銀行横手支店	2000	1.12円	42. 7. 20	預り証(約束手形)	玄 米	300俵	石田四郎兵衛預り、連帯保証	
42. 7. 20	石田幸之助	秋田銀行横手支店	2000	不明	不明	預り証(約束手形)	生 糸	27貫		
42. 8. 2	石田久兵衛	秋田銀行横手支店	1000	不明	不明	預り証(約束手形)	玄 米	300俵	石田四郎兵衛預り	
42.10.20	石田幸之助	秋田銀行横手支店	2000	不明	43. 1. 20	預り証(約束手形)	玄 米	450俵	石田四郎兵衛預り、連帯保証	
42.11. 4	石田久兵衛	秋田銀行横手支店	1000	不明	不明	預り証(約束手形)	外国米	70袋		
42.11. 4	石田久兵衛	秋田銀行横手支店	1000	不明	不明	預り証(約束手形)	生 糸	35貫		
大正1.10. 4	石田合名(石田太吉)	秋田銀行	6900	不明	2. 1. 21	約束手形	生 糸	16貫	石田四郎兵衛預り	
1.12.13	石田合名(石田太吉)	秋田銀行	2600	不明	2. 1. 21	約束手形	玄 米	450俵	石田四郎兵衛預り	
1.12.13	石田太吉	秋田銀行	4200	不明	2. 1. 21	約束手形	生 糸	86.88貫		
1.12.27	石田合名(石田太吉)	秋田銀行	3470	不明	2. 1. 25	約束手形	公 債	172.45貫		
2. 1. 23	石田合名(石田太吉)	秋田銀行	3470	不明	不明	担保品差入契約書	不明	不明		
2. 1. 27	石田合名(石田太吉)	秋田銀行	3470	不明	2. 2. 29	担保品差入契約書(約束手形)	生 糸	86.8貫		
2. 2. 5	石田合名(石田太吉)	秋田銀行	2230	不明	2. 3. 6	担保品差入契約書(約束手形)	生 糸	56.19貫		
2. 2. 8	石田合名(石田太吉)	秋田銀行	2750	不明	2. 3. 9	担保品差入契約書(約束手形)	生 糸	69貫		
2. 2. 22	石田合名(石田太吉)	秋田銀行	4200	不明	2. 3. 23	担保品差入契約書(約束手形)	公 債	3000円		
2. 2. 22	石田合名(石田太吉)	秋田銀行	2400	不明	2. 3. 23	約束手形	不明			
2. 2. 22	石田合名(石田太吉)	秋田銀行	6900	不明	2. 3. 3	約束手形	不明			
2. 2. 24	石田合名(石田太吉)	秋田銀行	3470	不明	2. 3. 25	約束手形	不明			
2. 2. 24	石田合名(石田太吉)	秋田銀行	2000	不明	2. 2. 3	約束手形	生 糸	80.88貫		

(出典) 石田家所蔵史料

表7 増田銀行の石田家金融

年 月 日	氏 名	払込先	金額(円)	利 子	返済期日	種 類	担 保	備 考	裏書先
明治33.7.3	石田太吉(石田四郎兵衛後見人)	増田銀行	100	4銭(100円につき日歩)	33.9.30	約束手形	不 明		
33.7.5	石田太吉(石田四郎兵衛後見人)	増田銀行	100	4銭(100円につき日歩)	33.9.30	約束手形	不 明		
37.12.15	長坂又兵衛	不明	1100			倉預証券(約束手形)	大豆類	石田四郎兵衛預り	
38.3.7	石田幸之助	不明	500			倉預証券(約束手形)	米	石田四郎兵衛預り	
38.9.30	石田幸之助	不明	不明			米預証(約束手形)	米	石田四郎兵衛預り	
38.11.22	長坂商店	不明	1100			倉預証券(約束手形)	大豆類	石田四郎兵衛預り	
40.5.27	石田合名	石田太吉	500	3.75円	40.6.30	約束手形	不 明		増田銀行
45.2.15	石田合名	増田銀行	400			担保品差入証券(約束手形)	生 糸	10.251貫	
45.4.18	雄平煙草元売廻合名(石田四郎兵衛)	増田銀行	150			不明	不 明		
45.7.29	石田四郎兵衛、石田和吉、高橋文太郎	増田銀行	3000			不明	不 明		
45.7.29	石田四郎兵衛、石田和吉、高橋文太郎	増田銀行	3300			不明	不 明		
大正1.9.18	石田合名(石田四郎兵衛)	増田銀行	200			不明	不 明		

(出典) 石田家所蔵史料

表8 五葉銀行の石田家金融

明治年月日	氏 名	払込先	金額(円)	利 子	返済期日	種 類	担 保	備 考	裏書先
33.7.17	石田合名(石田太吉)	五葉銀行	300	不明	33.9.30	約束手形			なし
33.7.18	石田合名(石田太吉)	五葉銀行	不明	不明	33.9.30	担保証券(約束手形)	黄煙草	30個	
33.8.30	石田四郎兵衛(石田太吉)	五葉銀行	200	不明	33.11.25	約束手形			なし
35.12.16	石田四郎兵衛	五葉銀行	不明	0.01銭(100円当り)	36.3.28	預り書(約束手形)	生 糸	9貫	
35.12.23	石田合名(石田太吉)	五葉銀行	400	不明	不明	約束手形	生 糸	9貫	なし
35.12.24	石田合名(石田太吉)	五葉銀行	不明	不明	不明	生糸預り書	生 糸	9貫	石田四郎兵衛預り
36.1.26	石田合名(石田太吉)	五葉銀行	625	不明	36.3.31	預り書(約束手形)	生 糸	18貫	石田四郎兵衛預り
36.6.23	石田合名(石田太吉)	五葉銀行	300	0.525銭	36.9.20	預り書(約束手形)	米	100俵	石田四郎兵衛預り
37.5.17	石田合名(石田太吉)	五葉銀行	500	15.93円	37.8.15	担保証券(約束手形)	玄 米	200俵	石田太吉預り
38.1.9	長坂又兵衛	五葉銀行	650	不明	不明	預り書(約束手形)	大 豆	250俵	石田太吉預り
38.1.18	長坂又兵衛	五葉銀行	650	不明	不明	預り書(約束手形)	大 豆	250俵	石田四郎兵衛預り
38.2.28	石田合名(石田太吉)	五葉銀行	250	3.2円	38.3.21	担保証券(約束手形)	玄 米	100俵	石田太吉預り
38.3.29	石田合名(石田太吉)	五葉銀行	800	不明	38.3.21	預り書(約束手形)	玄 米	350俵	石田合名預り
38.4.19	本郷松四郎	五葉銀行	不明	不明	不明	預り書(約束手形)	玄 米	1000俵	石田四郎兵衛預り
38.6.14	石田合名(石田太吉)	五葉銀行	300	2.52円	38.7.30	担保証券(約束手形)	玄 米	150俵	石田合名預り
38.6.20	石田合名(石田太吉)	五葉銀行	500	1.55円(8.17割戻)	38.7.30	預り書(約束手形)	玄 米	200俵	石田四郎兵衛預り
38.9.21	仙台谷佐吉	不明	不明	不明	不明	預り書(約束手形)	玄 米	810俵	石田四郎兵衛預り
38.11.27	石田合名(石田太吉)	五葉銀行	500	11.02円	不明	担保証券(約束手形)	生 糸	18貫	なし

(出典) 石田家所蔵史料

表9 池田家よりの借入金

明治年月日	金額(円)	返済期日	利 子	返済日	返済金(円)	残金(円)	残金利子	担 保
23.6.9	400	25.2	84円	25.3		84	400	なし
23.9.2	300	25.2	54円	25.3.5		54	300	なし
24.7.31	300	25.2	18.9円(9朱)	25.3.5		54	300	9朱
25.6.4	200	26.7	23.8円(8.5朱)	26.8.3		23.8	200	8.5朱
25.8.3	300	26.7	30.6円(8.5朱)	26.8		30.6	300	8.5朱
25.8.21	300	26.7	30.6円(8.5朱)	26.8		30.6	300	8.5朱
26.6.1	300	27.6	31.2円	27.7.5		31.2	300	8朱
27.7	300	28.6	28.8円(8朱)	28.7.19		28.8	300	9朱
28.4	400	29.4	46.8円(9朱)	29.5.4		46.8	400	9朱
29.4	300	29.6	32.4円	29.6		32.4	300	9朱
28.8	500	29.6	55円(1分)	29.6		55	500	1分
29.4.1	300	30.4	39円	30.5.13		39	300	1分
29.5	400	30.4	43.2円(9朱)	30.5.13		43.2	400	9朱
29.5.2	300	30.4	36円	30.5.13		36	300	1分
29.7.5	300	30.6	33円	30.6.7		33	300	1分
29.7	300	30.6	32.4円	30.7.3		32.4	300	9朱
30.3.4	500	31.2	60円	31.3.1		60	500	1分
33.1.3	400	33.12	43.2円	34.1.4		43.2	400	9朱
34.1	400	34.12	43.2円	34.12.31		43.2	400	9朱
34.6.20	500	35.5	57円	35.6.8		57	500	9.5朱
34.7.31	1000	35.7	114円	35.8		114	1000	9.5朱
35.1	400	35.12	43.2円	35.1.6		43.2	400	9朱
35.1.20	500	35.12	54円	36.1.6		54	500	9朱
35.7.2	250	36.6	27円	36.6.30		27	250	9朱
35.8.2	1250	36.7	135円	36.8.4		135	1250	9朱
35.8	1000	36.7	114円	36.8.4		114	1000	9.5朱
36.9.4	200	37.11	25.5円(8.5朱)	37.12.4		25.5	200	8.5朱
36.9.1	300	37.11	38.25円	37.12.4		38.25	300	8.5朱

(出典) 石田家所蔵史料

表10 伊勢屋よりの借入金

明治年月日	金額(円)	返済期日	利 子	担 保
38.6.1	4000	39.5.25	9厘(1月1円当り)	なし
39.3.1	4000	40.4.28	9厘(1月1円当り)	なし

(出典) 石田家所蔵史料

表11 五業銀行公債借用

明治年月日	種 類	金 額	返済期限	利 子	備 考
32.1.31	無記名軍事	200	32.6.30	4円(100円につき1月)	保証人あり
32.4.18	無記名整理	500	32.9.30	3.5円(100円につき1月)	保証人あり
32.4.18	記名整理	2000	32.9.30	14円(1月当)	保証人あり
33.1.13	無記名軍事	500	32.7.31	0.5円(100円につき1月)	保証人あり
33.3.15	無記名	2000	33.7.31	不明	保証人あり
33.3.15	整理、軍事	2000	33.7.31	24.8円(日歩2銭)	保証人あり

(出典) 石田家所蔵史料

表12 佐原亀治公債借用

明治年月日	種 類	金 額	返済期限	利 子	備 考
32.4.12	無記名軍事	50	32.9.30	2円	保証人なし
33.1.27	無記名軍事	50	33.7.31	1.5円	保証人なし

(出典) 石田家所蔵史料

表13 秋田銀行割引計算

年 月 日	手形割引(円)	割引料金(円)	日 数	歩合(銭)
40.11.30	800	13.3	62	2.7
42.6.16	1000	26.81	89	2.9
42.7.23	1500	39.15	90	2.4
42.8.26	1000	25.2	90	2.8
42.10.20	2000	51.04	88	2.9
42.11.24	1000	24.92	84	2.8

(出典) 石田家所蔵史料